〔付〕大祓詞

＊日本の歴史は語り部によって伝えられ、それが初めて文字で書かれて『古事記』という書物ができたように、大祓の詞も、もともと唱えることによって伝えられてきました。それが今から約八百七十年ほど前に、文字として書かれるようになりました。参考までに、漢字交じりの文を挙げてみましたが、この漢字の意味を追うのではなく、無我のこころで、声に出してお唱えすることが大事です。

高天原に神留り坐す　皇親神漏岐　神漏美の命以ちて　八百万神等を　神集へに集へ賜ひ　神議りに議り賜ひて　我が皇御孫命は　豊葦原瑞穂国を　安国と平けく知ろし食せと　事依さし奉りき　此く依さし奉りし国中に　荒振る神等をば　神問はしに問はし賜ひ神掃ひに掃ひ賜ひて　語問ひし磐根　樹根立　草の片葉をも語止めて　天の磐座放ち　天の八重雲を　伊頭の千別きに千別きて　天降し依さし奉りき　此く依さし奉りし四方の国中と大倭日高見国を安国と定め奉りて　下つ磐根に宮柱太敷き立て　高天原に千木高知りて皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて　天の御蔭　日の御蔭と隠り坐して　安国と平けく知ろし食さむ国中に成り出でむ天の益人等が　過ち犯しけむ種種の罪事は　天つ罪　国つ罪　許許太久の罪出でむ　此く出でば　天つ宮事以ちて　天つ金木を本打ち切り　末打ち断ちて千座の置座に置き足らはして　天つ管麻を本刈り断ち　末刈り切りて　八針に取り辟きて天つ祝詞の太祝詞事を宣れ

此く宣らば　天つ神は天の磐門を押し披きて　天の八重雲を伊頭の千別きに　千別きて聞こし食さむ　国つ神は高山の末　短山の末に上り坐して　高山の伊褒理　短山の伊褒理を掻き別けて聞こし食さむ　此く聞こし食してば　罪と言ふ罪は在らじと　科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く　朝の御霧　夕の御霧を　朝風夕風の吹き払ふ事の如く　大津辺に居る大船を　舳解き放ち　艫解き放ちて　大海原に押し放つ事の如く　彼方の繁木が本を　焼鎌の敏鎌以ちて　打ち掃ふ事の如く　遺る罪は在らじと　祓へ給ひ清め給ふ事を　高山の末短山の末より　佐久那太理に落ち多岐つ　速川の瀬に坐す瀬織津比売と言ふ神　大海原に持ち出でなむ　此く持ち出で往なば　荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百会に坐す速開都比売と言ふ神　持ち加加呑みてむ　此く加加呑みてば　気吹戸に坐す気吹戸主と言ふ神　根国　底国に気吹き放ちてむ　此く気吹き放ちてば　根国　底国に坐す速佐須良比売と言ふ神　持ち佐須良ひ失ひてむ　此く佐須良ひ失ひてば　今日より始めて罪と言ふ罪は在らじと祓へ給ひ清め給ふ事を　聞こし食せと　恐み恐みも白す

いろは祝詞

いろはにほへと
ちりぬるをわか
よたれそつねな
らむうゐのおく
やまけふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせすん

ひふみ祝詞

ひふみ
よいむなや
こともちろらね
しきる
ゆゐつわぬ
そをたはくめか
うおえ
にさりへて
のますあせゑほ
れけん

天壌無窮の神勅

豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は
是れ吾が子孫の王たる可き地なり
宜しく爾皇孫、就きて治せ　行矣
寶祚の隆えまさむこと、當に天壌と窮り無かるべし

宝鏡奉斎の神勅

吾が兒、此の寶鏡を視まさむこと、
當に吾れを視るがごとくすべし。
與に床を同じくし殿を共にして斎鏡と為す可し。

斎庭稲穂の神勅

吾が高天原に所御す斎庭の穂を以て、
亦吾が兒に御せまつるべし。